

研究・調査報告書

報告書番号	担当
91	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
<p>Binge drinking and Axis I psychiatric disorders in community-dwelling middle-aged and older adults: results from the National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions (NESARC).</p> <p>地域に住む中年および老年成人における多量飲酒と Axis I psychiatric disorders : National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions の結果から</p>	
執筆者	
Chou KL, Liang K, Mackenzie CS.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Clin Psychiatry. 2011 May;72(5):640-7.	
キーワード	
アルコール、喫煙、ニコチン依存	
要 旨	
<p>目的: 本研究の目的は、社会人口学的に中高年の多量飲酒と関連する因子を記述し、多量飲酒と DSM-IV に示される気分、不安、アルコール使用障害の発生、タバコ、社会人口学的変数や生涯にわたる当該障害の診断と独立な違法ドラッグの使用との関連を調べることにある。</p> <p>方法: 我々は The National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions という 3 年間の地域集団を主体とした前向き研究のサブサンプルを利用した二次資料の解析を実施した。この調査は 50 歳以上の 13, 489 人のアメリカの地域在住の成人の全国的な代表サンプルを対象とし、2001 年-2002 年および 2004 年-2005 年の両方にインタビューを実施している。本調査は 11 つの DSM - IV に基づいた気分、不安、アルコール使用障害、ニコチン依存および違法薬物使用について 3 年間追跡し、The National Institute on Alcohol Abuse and Alcoholism's Alcohol Use Disorder and Associated Disabilities Interview Schedule-DSM-IV Version を用いることによって評価した。</p> <p>結果: 50 歳以上の人の中で、男性の 15.6%、女性の 5.7%に 2001-2002 年のベースライン評価前に多量飲酒していたことを報告していた。共変量による調整後、ときどき多量飲酒をする男性および頻回に多量飲酒をする男性の双方で、多量飲酒をしない男性飲酒者に比べ a アルコール乱用障害になる傾向が強く (調整オッズ比 [AOR]= 2.90[95% CI,1.82-4.62]、AOR=5.68[95%CI, 3.79-8.51]、またアルコール依存症になる傾向も強かった (AOR=3.69[95%CI, 1.75 から 7.75]と AOR=9.21[95%CI, 5.59-15.18])。同様に共変量調整後、ときどき多量飲酒をする女性および頻回に多量飲酒をする女性の双方で、アルコール乱用障害になる傾向が強く (AOR= 4.43[95%CI, 1.85- 10.60]と AOR=3.49[95%CI, 1.64-7.43])、またアルコール依存症になる傾向も強かった (AOR= 5.20[95%CI, 1.56-17.33]と AOR=19.47[95%CI, 7.59 から 49.98])。また女性対象者では、ときどき多量飲酒する人では広場恐怖症を伴わないパニック障害 AOR=2.23, 95%CI, 1.01-4.91) と心的外傷後ストレス障害 (AOR= 2.67, 95%CI, 1.05~6.84) のリスクと関連していた。</p> <p>結論: 米国における中高年において、多量飲酒はアルコール使用障害のリスク増加と強く関連していた。本結果により、多量飲酒に関連するリスクの有益な情報が得られるとともに、中高年における精神保健のための予防戦略の目標が示された。</p>	